高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会共催事業

記念講演会

「浦戸湾の歴史をたどる ―浦戸湾風景絵巻を中心に―」

高知県立高知城歴史博物館学芸課長　藤田　雅子 氏

藤田氏

桂浜から城下堀詰に至るまでの道のりが一つにまとめられて描かれた絵巻、「浦戸湾風景」（高知県立高知城歴史博物館蔵、以下「城博」と略記）。その特徴や意義はどのようなものであったのだろうか。山内家に伝わった本絵巻の作者は不詳だが、地形や描法から江戸時代後期のものと推定される。また本作以外にも県内には同場面を描いた絵巻や内湾を描いた「吸江図」が複数確認されており、浦戸湾の風景が当時人気の画題だったことがうかがえる。

浦戸湾風景の需要と供給のあり方が窺える好資料として、江戸後期の文人画家、楠瀬大枝の日記「燧袋（ひうちぶくろ）」（高知市民図書館蔵）が挙げられる。そこには城下豪商で「南路志」を編さんした美濃屋忠五郎（武藤平道）から大坂行の手土産にと吸江図の注文を受けたり、藩主から内々の依頼で土佐名勝図の下図を制作したりと、浦戸・吸江を題材とした絵画の制作依頼に関する記事が複数見られる。これは浦戸湾の風景が地元文化人から需要が高い画題であった証左であり、その背景には当時の全国的な名所図会への需要の高まりが追い風となっていたであろうことも想像に難くない。

こうした浦戸湾風景絵巻の制作背景と文化的需要のあり方をふまえた上で、以降は歴史資料として各場面を読み解いて行きたい。浦戸湾の機能は、大きく三つに分けられる。第一に、土佐藩の中心拠点である高知城へ至る玄関口としての機能である。江戸幕府の浦々巡見に対応するために土佐藩が用意した「寛文七年対巡見使差出国絵図」（城博蔵）には、土佐湾の航路や寄港先となる港の情報が書き込まれている。そこでは「干潮（之時）船出入難成」とあり、潮位によっては船の通行が難しかったことが分かる。複数の河川から流れ込む土砂の堆積に加え、岩礁が点在することがその原因で、絵巻でも湾口には岩礁が、河口付近には砂地で人々が潮干狩りを楽しむ様子が描かれている。幕末に高知を訪れた英外交官アーネスト・サトウも、湾内は吃水の浅い船しか通行できず、途中で船を乗り換えたと記す。

こうした浦戸湾の特徴は、容易に湾内へ船を侵入させない、天然の要塞と言い換えることができよう。慶長元年に起きたサン・フェリペ号事件では、遭難した外国船を湾内に引き入れる途中で座礁・大破している。良港とはとても言えないが、裏を返せば軍船・大船による部外者の侵入が難しく、城下防衛の観点からは優れた地形との見方もできる。

二点目は、都市住民の行楽地としての機能である。先述の通り浦戸湾は名所・景勝地を描いた風景画だが、そこには行楽を楽しむ人々の姿を各所に見ることできる。特に注目したいのが、孕周辺である。孕山には江戸中期、五代藩主豊房が桜を植えて以来藩の保護を受け、桜の名所へと成長した。城下の人々が季節になれば花見に繰り出し、宴会や歌会を行う様子は当時の日記にも見え、浦戸湾が都市住民の行楽や文化的な活動の場であったことが読み取れる。

最後に、都市住民の生活を支える、近郊農村・漁村としての役割について説明したい。浦戸湾は、一大消費地である高知城下町の近郊という地の利を生かし、その需要を満たす生産地の側面も有していた。絵巻でも、魚を捕る漁師達の姿や塩田で働く人々の姿が見て取れ、さらに五台山・吸江村では機織りをする人の姿も見える。

都市近郊農村・漁村は商品を消費地に届ける上で距離的に有利だが、加えて水上輸送の便利の良さが流通の円滑化に貢献していた。中でも城下郭中に至る堀川は輸送・交通上、最も重要な水路である。正保城絵図など江戸中期までの絵図類では九反田と材木町の間に土手があり、水路が一度途切れていて迂回または積み替えの必要があった。しかし絵巻にはこの土手がなく、城下下町まで直線的な水路で運び込むことができるようになっている。凪いだ浅瀬の続く浦戸湾は大船の通行は困難だが、庶民が小舟を操り生活に使用するには適しており、守りやすく暮らしやすい環境を城下・周辺住民に提供していたのである。

以上のように浦戸湾風景絵巻を手がかりに江戸時代における浦戸湾と沿岸部の持つ機能を紹介してきたが、最後に本作にこれらの要素を盛り込んだ意義を考えて結びとしたい。

中世までの土佐は、浦戸湾よりも東に政治の中心地である国府や守護の拠点があった。そのため前述した浦戸湾の機能はすべて、山内家が本拠地と定め、城下町を発展させたことでこそ意味を持ったと言える。本作は土佐の豊かな自然と文化・経済の繁栄を細部にわたって描いている点が見所である。その背景には、長きにわたって太平の世を守り、土佐藩を発展させた山内家の治世への賛辞、他国の都市や景勝地にも劣らないと誇る郷土への愛着があり、だからこそ当時の人々に愛された題材となったのではないだろうか。

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会　総会・研究発表会

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会総会は6月17日、坂本龍馬記念館新館ホールにおいて、第15回総会・研究発表会を開催した。

昨今の新型コロナウイルス流行状況を鑑み、総会は昨年と同様書面決議とし、昨年度事業報告、今年度事業計画とも承認された。

研究発表会では会員2名による研究発表を午前・午後にわたり行った。午前の第1部では会員の網屋喜行氏が、「海南政典」の官僚制について報告した。午後の第2部では、龍馬記念館との共催行事として、高知県立高知城歴史博物館の藤田雅子学芸課長を講師に招き、開催中の特別展「花と歴史の爛漫土佐第1部　桂浜シン発見―浦戸湾歴史探訪」にからみ、浦戸湾風景絵巻を読み解く講演会を開催した（網屋氏・藤田氏の講演の様子は、7月15日～31日の間、龍馬記念館ＨＰで配信）。続いて副会長の渋谷雅之氏が、慶応三年のいろは丸事件についての研究報告を行った。

当日次第

【テーマ】
「龍馬研究の水準を高め、龍馬の真実を追究し、その精神を現代に生かそう」

◆日時
2023年6月17日（土）
9時30分～16時30分

◆会場
高知県立坂本龍馬記念館
新館ホール

●9時30分
・総会（書面決議報告）

●10時　第1部　研究発表会
「海南政典の、ほぼ50年ウェーバーに先行した「官僚制」とその構築に向けた吉田東洋の思索過程」
網屋喜行氏（現代龍馬学会会員）

●13時30分　第2部
・会長挨拶
・来賓挨拶
高知県教育次長　竹﨑　実氏
高知市教育長　松下　整氏
・龍馬記念館令和5年度特別展記念講演会
「浦戸湾の歴史をたどる
―浦戸湾風景絵巻を中心に―」
藤田雅子氏（高知県立高知城歴史博物館学芸課長）

●15時　研究発表会
「いろは丸の急用」
渋谷雅之氏（現代龍馬学会副会長）

総会書面議決のご報告

新型コロナウィルス感染拡大防止のため、2023年度の事業計画や予算等の総会審議事項については事前に書面議決を行いました。

その結果は次の通りです。

会員数　92名
第1号議案（1）（2）（3）
承認70名　回答なし22名
第2号議案（1）（2）
承認70名　回答なし22名
第3号議案
承認70名　回答なし22名

以上により規約第9条（議決）に基づき、すべての議案について、過半数の承認をもって可決されましたことをご報告いたします。

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会
会長　宮　英司

研究発表会

海南政典の、ほぼ50年ウェーバーに先行した「官僚制」とその構築に向けた吉田東洋の思索過程

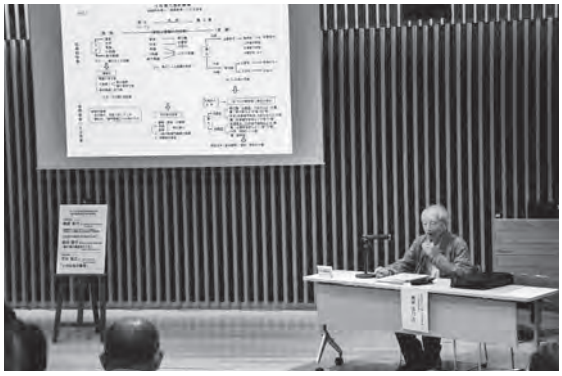
現代龍馬学会会員・鹿児島県立短期大学名誉教授・吉田本家末裔
網屋　喜行

石尾芳久氏は、ドイツの歴史学者であるマックス・ウェーバーの「官僚制論」を分析道具にして、吉田東洋が編集した「海南政典」について画期的な研究を行った。ウェーバーは一八六四年生まれつまり東洋没後の人物なのであるが、石尾氏の研究を読んでいると、東洋が、ウェーバーの官僚制をあらかじめ知っていたかのような錯覚に陥ってならない。そうした私自身の錯覚を打ち砕くというのが今の問題意識で、本報告はその試論である。

東洋は、「海南政典」で、土佐藩官僚制の改革を企てた。山内氏が掛川から持ち込んだ「土佐藩官僚制」は、もともと幕府のそれに倣うものである。江戸時代の大名は土地と人民を私有したが、政治用語ではこれを「家産国家」といい、そのための組織を「家産官僚制」と呼んでいる。

土佐藩の職制では、「近習」「外輪（とがわ）」の下に、それぞれ官僚

制が構成され、一般的に、藩士は「家柄」に応じて相応する役職に就く。『高知県史　近世史料編』によると、「上士」に属するのは家老十三人、中老十一人、馬廻三九六人（家臣団の中核）、小姓組・留守居組三四一人である。一方、「下士」に属するのは郷士・徒士・徒士格・組外・足軽の五階層であるが数は不明。さて、馬廻である東洋は、家柄以上の役職である仕置役に就く。これは、藩主豊信が特別に抜擢したものであるが、東洋自身は、有能な人材の「家柄」に由らない登用制度を目指していた。



文化十三（一八一六）年生まれの東洋は、弘化二（一八四五）年、三十歳の時に、藩主豊熙へ建白書「時事五箇条」を提出する。このなかで、東洋は、家柄に拘らず有能な人材を登用することを提唱するが、これは後に「海南政典」で制度化されることとなる。嘉永五（一八五二）年には、藩主豊信の命により「北条泰時論」を執筆。悪人であった泰時が執権就任ののち前非を悔い、政治の道に邁進したことを論ずる。翌六年、東洋は大目付に就任、次いで仕置役に抜擢された。以後、東洋は、年譜上では時期が特定できないが、合計十一編の「史論」を執筆した。その内訳は、古代中国が六編、日本が三編でうち一編は藤田東湖宛の書簡論文である。東洋は特定の君主を論じることで、のちに「海南政典」で提唱する人材登用の足固めをしている。なお、東洋は、「史論」を斎藤拙堂や塩谷后陰らの学者にも見せて批評を仰いでいる。

東洋の「遺稿集」が残っている。半分ほどはエッセイ、あと半分は政治日誌である。後者は多くの学者が研究で利用しているが、前者はあまり利用されていない。それは、全てが漢文の「白文」であり、読みにくいためと思われるが、今後はエッセイ部分の読解・研究が必須である。

さて、「海南政典」における「外朝官」「内朝官」は、石尾氏の研究によると、中国の古典である「周礼」が出典である。「周礼」には、「外朝官」が万民に国の重大事項（「国危」「国遷」「立君」）を諮問すべし、という一文がある。東洋は、人材登用論の理念としての「外朝官」制度に着目した。また、「小禄者」抜擢のため導入した「官秩制」は、幕府の「足高の制」に由来していた。そして、「海南政典」官僚制の根幹たる「藩政と家政の分離」は、東洋の暗殺で一旦は否定されたものの、明治政府が「藩治職制」で制度化したことでよみがえったのである。

いろは丸の急用

現代龍馬学会副会長・
徳島大学名誉教授
渋谷　雅之

慶応三年四月、坂本龍馬は竹島（鬱陵島）を開拓し、行き場を失っている脱藩浪士を送り込み、それぞれに生きる途を与えようとしていた。ところが四月十九日、龍馬ら海援隊士の乗ったいろは丸は方角違いの上方に向けて長崎を出港する。この日出発をひかえた坂本龍馬と後藤象二郎による金銭上のやりとりが岩崎彌太郎の日記記録された。龍馬の「金せびり」という、やや微笑ましい話として有名なものである。

大坂への出発にあたり、後藤象二郎は海援隊士十六人に対し、一人五両見当の給与百両を与えた。これに対して龍馬は「それは海援隊士に対する給与だろうが、隊長たる自分に対してはどうしてくれるのか？」と岩崎彌太郎にねじ込んだ。これに対して後藤は「その話は決着済みなので、支給するにはおよばない」と突っぱねる。龍馬は引き下がらず、「此度登坂ハ無余儀事」なので、ぜひとも別に五十両借用したいと食い下がった。今回の大坂行きは自分の意志ではなく「やむを得ず」行くのだから、五十両くらい支給するのは当然だ、といった、言わば後藤象二郎の「足下を見た」主張なのである。彌太郎は、仕方なく自分のふところから「餞別」という名目で五十両を龍馬に渡す。

ここに書かれた「余儀無き事」とは何だろうか？一つ思い当たることがある。それは後藤象二郎が龍馬に命じて、山内容堂または薩摩の小松帯刀ら、もしくはその両方に対する書状を届ける……といった用務である。後藤象二郎にとって、京都で自分を待っているであろう山内容堂や、後藤の登場を待ち構えているかもしれない薩摩の小松や西郷に対して何らかのアクションが必要だったはずである。そうした情報の伝達は通常の飛脚では時機を失する恐れがあり、また機密性の点で不安があったであろう。龍馬がいろは丸で運んだかも知れない書状の内容としては、竹島渡航に関して容堂に対する事情報告や、四侯会議とその後の政局に向けた土佐藩の方向など、さらには後年「船中八策」という名で有名になった土佐藩の新政府構想のことなど、考え得ることはたくさんある。

そしていろは丸は四月二十三日の深夜、瀬戸内海の六島付近で紀州藩船明光丸と衝突して沈没する。そこに至るまで、いろは丸事件に関しては幕末の尊皇攘夷思想や華夷思想と関連して膨大な政治的背景がある。それらの詳細については、今後発刊が予定されている「現代龍馬学会論集」において述べたい。

こぼれ話 ― 犬歩棒当記（五十一）―

一周まわって龍馬は良い人

宮川 禎一

最近の龍馬評価の変遷問題を書いてみたい。読者の皆さんはどの項目であろうか？

①坂本龍馬は薩長同盟成立や大政奉還に深く関わっていて明治維新の扉を開いた凄い英雄だ。尊敬します。

②いやいやそんな訳がない。ただの薩摩藩のパシリで、ほとんど何もしてない。司馬遼太郎が書いた幻想に皆さん騙されないで。

③龍馬は相当な策士であって陰で寝技を繰り出したとても悪い奴だ（けなすふりをしながら褒めるという高度な評価術）。

④一周まわって実は良い人だった。

筆者は③なのだが、ここでは④を書いておこう。坂本龍馬は良い人説だ。後世の人間は龍馬のことを上げたり下げたりする。墓の中の龍馬は「俺に会ったこともないヤツがまたなにか言ってるよ」と思っているだろう。

確かに良い人は本当に良い人であるのか分からない。悪い人かも知れない。悪い人もそうだ。実は良い人かも知れない。百五十年を経てもそうなのだから「人は時間を経ても正しく評価できない」が正しいのだろう。時を経てその人物の評価が定まる、とは無縁な龍馬だ。たぶん他の人物もそうなのだ。

熊本の道家家文書の慶応二年六月頃と推定されている書状に出て来る「坂下良馬」の評価はこうだ。「良馬は別而（わけて）順良之人物之由」である（第三十一回熊本大学附属図書館貴重資料展『細川家臣・道家（どうけ）家の幕藩初期と明治維新』解説目録の十五頁 平成二十七年）。名前のとおりの良い馬である。解説文によれば「熊本藩と関係が深い越前藩の書生が龍馬と行動をともにしている関係で入ってきた情報であるらしい」とある。横井小楠が肥後出身で越前藩と関りが深いからだ。

同時代の人がそう書いているのに、百五十年後の現代人が「悪い奴に決まっている」などと思う不思議さは人間の不思議だ。当時の人が良い人だと記そうが「そんなのは嘘だ」と現代人が思う面白さだ。こう書くと「歴史とは何か」に至る。自分が思うことが正しい歴史だ。そう思う自分がそこにいる。唯識論である。

今回は「一周まわって龍馬は良い人」という話でした。

伏見寺田屋近くの
「龍馬とお龍、愛の旅路」像の上半身。
平成 25 年造立。

企画展

「龍馬の真髄 ― 龍馬は何者？Who is Ryoma？―」展

10月13日（金）～2024 1月8日（月・祝） 会期中無休

龍馬の手紙から「活躍」や「志」、「性格」、「趣味」を読み解きます

申込受付中

連続講演会「さまざまな立場からみる幕末の京都」

第3回 幕府高官「京都所司代」再考

- ●講　師　上村香乃（当館学芸員）
- ●日　時　10月28日（土）13:30～15:30
- ●場　所　新館ホール

「京都の守護」を裏のテーマに、移り行く幕末の世の過渡期とも言うべき開国期の京都について、従来から幕政に携わってきた京都所司代の立場から再考します。

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会
〒 781-0262 高知市浦戸城山 830
TEL（088）841-0001　FAX（088）841-0015
mail:gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp